

① 「木質」の定義について

- ・「木質」という言葉は人によってとらえ方が異なる。
- ・「木質」という言葉について明確なものにしくなくても良いので、金沢の定義を持つべきである。
- ・「木造」は明治から始まった言葉である。それまでは建物は全部木造だったから言う必要がなかった。
- ・一般的な人に伝わるようにすべきである。
- ・イメージとして「木質都市」の意味をきちんと伝えて欲しい。
- ・木の文化と言った方がすっきりとする。
- ・どんな要素が入るのか考えてみる必要がある。
一つは、SDGsの観点からサステナビリティ、持続可能な要素である。地域の林業振興とのリンクは重要な要素である。
- ・二つ目に、心豊かな生活が行える空間ということ。いろんな人が使いやすいという要素である。
- ・木には「温かみ」、「温もり」といったイメージの他に、「シャキッと感」、「緊張感」がある。
- ・日常的空間と非日常的空間の2つの側面があり、商業施設は非日常的であり、オフィスは日常的である。
- ・木造の家で育ったかどうかで感じ方は違う。「暖かみ」や「緊張」が材料と関係あるかどうかは分からない。
- ・用語集が欲しい。

② 「木質都市・金沢」の創出方針について

- ・過去から学ぶものも金沢は持っている。その上で未来のまちを考えたい。
- ・アスペクト比（建物の高さとの比）で考えると7、8階程度までであり、7、8階までなら、構造的には木で可能である。
- ・まちなみ、個々の建築、空間のつながりが大切である。
- ・様々な時代の建築物がある中で、新たな木造が融合できるか。
- ・木造で超高層を造る必要はなく、木造と鉄骨とコストも含めて比較することが必要になり、イメージでは31mまでが現実的である。
- ・防火的は、まちなみ保存のような面もあり、中高層に木造を持ち込むことができるのかという議論がある。金沢は他の都市にできないことができるので、他の都市ではできないことを考えて欲しい。
- ・まちなみ保存や景観を考えていくと、安全性も含めて、伝建地区などでは古い建物を残すこと、加えて他の地区では新築も一緒に考えなければならない。
- ・人が住み続けることができることが大切である。金沢には消防力、文化財、一般の人の繋がりがあがる。
- ・新しい金沢の町家ができてくると面白い。文化を発信すべき。
- ・金沢市民が、将来「金沢の町家、金沢のタウンハウス」と呼びたくなるものを「木」で作られ文化を発信すると面白い。
- ・新しいものと金沢町家が融合した時が面白い。そこに、生業、日常空間が今後どのように木造と絡んでいくか考えていく。
- ・「金沢のまちに建つ」木の建物の在り方を探る。
- ・未来のレイヤー（20年後、50年後）として、金沢における木造を考える。
- ・50代と20代とでは木造の考え方がずいぶん違う。木との触れ方が違うからであり、若者にとっては、木のイメージはエコ。広がりを持っているので、そこが見えると面白いと思う。

- ・金沢はグローバルな価値を持っている。ユネスコ創造都市になっているなど、世界に誇れる価値を持っている。
- ・金沢が持っている内発的な市民力や伝統的な景観が大切な財産である。
- ・外人は見た目だけではなく、裏にあるストーリーを強く問う。
- ・ジェンダーの視点で考えることも必要かもしれない。
- ・木質都市をプラットフォームとしてそれらを見える化するとよい。
- ・金沢が木質都市として世界で誇れるかどうか。
- ・日本全体が木の文化であること、それを取り戻したい。
- ・家具、伝統工芸など木の文化全体を含む「木」の文化全体を考えていきたい。
- ・木のベンチは都市美文化賞を受賞し、鼓門もある。
- ・木の文化都市が通じる。金沢が作る公共施設、学校は全て木でつくることも面白い。
- ・モデル地区を設定して経験の集積を進めてはどうか。
- ・「ここがこのようになったらいいよね」と提案するとよい。
- ・こんな街にしましょうよという絵を描いてみて、提案して、一般の人に伝えるようにしてほしい。

③ 金沢の特徴について

- ・香林坊片町商店街が木造建築をどんどん壊して近代化した時期があり、その後遺症が今でも治らないでいる。
- ・日本で最初の5階建て木質ビルが駅西にあるが、隣に建たず広がらない。
- ・空襲の時の焼夷弾から、みんな近代化しなければならないとなった。自信のない時代から景観条例をしているので、たいしたものである。
- ・都市美文化賞は民間で経済同友会が40年ほど前からしている。いい建物を褒めようと表彰している。ここ10年かは町家を改装した建物が賞をとるようになった。
- ・トレンドがいい方向に来ている。
- ・金沢城は3回の大火があった。それに懲りて消防を一生懸命にするようになった。市民生活と消防が結びついている。
- ・義勇消防があったから加賀とびをしている。消防署は自分たちのものという意識が高い。
- ・景観条例やまちづくり条例など、地区ごとにリーダーがいる。
- ・金沢は1986年に初めて来たが、中心部は木造建築物がまだかなり残っていた頃であった。
- ・金沢は地元経済界のリードがかなりあって、それに支えられてきた。

④ 実現化施策の提案について

<特区について>

- ・京町家が法規から外して、違う基準で行っている。建築基準法の適用除外をやっているということである。
- ・金沢市も、建築基準法適用除外の条例はある。大事なツールとして用意している。
- ・特区を活用するなど、新しい技術を用いる時は、既存のルールではやりにくい。
- ・特殊解としての特区を使うことは政策論として選択肢の一つ。特殊解から一般解となっていくこともある。特区により推進力が生まれる。

<サプライチェーン（供給連鎖）の強化について>

- ・今は林業に課題がありそう。国産材より外材の方が高くなってきている。難しい時期である。
- ・木質都市が外材でできているというのはあってはならない。
- ・製材業（木材を加工する業）においても県内市内で能力と現実があり、木材産業が県内でどういう状況であるか確認すべきである。その上で、建築にたどり着くまでのボトルネックを改善する。
- ・「潜在的にあるもの」と「現状」と「目標値」を提示することがあれば、循環型の「木」を考えられる。
- ・水平的に林業の供給側の問題と建築。コーディネーター的な視点を持たないといけない。森林業は「木質都市」に期待している。
- ・木を生み出している人と使う人を繋ぐ機能が今はない。
- ・今後森林環境税が増えていく。どんな風に使うか、今議論していつている。
- ・日本文化の根底は再生ということなので、生まれ変わっていく伊勢神宮のように。全体に完結しているまちが作れたら、本当の世界都市となる。
- ・内発的に自力でやろうとすると、SDGsをいくつかクリアできる。

⑤ その他の意見

<木質耐火等の現状>

- ・木質耐火で中高層というと、ゼネコンが自社の社宅等で実験的にやっている段階である。マーケットとして確立していない。
- ・不動産的にも、木造 30 年、鉄筋コンクリート 60 年と言われる。
- ・今は少しずつ変わってきている。鉄筋コンクリートで作った学校の校舎が壊されている時代。今や木造の校舎が見直されている。
- ・価値観が動いていることが大きな一つのテーマである。
- ・全国的にも、完全にRC化することは現実的ではなく、木で火災に強いものを作るほうがよくなってきている。
- ・戦前末期に木造が非常に早く燃え広がることがわかった。消防が来ても間に合わない。それでモルタルで周りを塗った。小さいものはそれほど（法律上）規制されていない。
- ・1960 年辺りまでは市街地火災が多かった。木造では火事に強いものが作れないと思い込んでいる。
- ・実験等は、東京でより地方都市で展開する方が現実的である。
- ・アーケードを付けると、全部不燃化しなければならない。